【論文】

ピコ・デラ・ミランドラにおけるプラトン主義理解とその影響

比留間　亮平

1　『人間の尊厳についての演説』と『九〇〇箇条の提題集』

本論では、ルネサンス期に活躍したイタリアの哲学者で、ルネサンスの代表的思想家としてしばしば取り上げられるジョバンニ・ピコ・デラ・ミランドラ（一四六三―一四九四）の思想を扱う。かつてブルクハルトがその後の研究に多大な影響を与えた『イタリア・ルネサンスの文化』におけるルネサンス論で、「世界と人間の発見」と題した章をピコの著名な『人間の尊厳についての演説 *Oratio de hominis dignitate*』（以下『演説』と略記）からの引用で締めくくって以来、多くの哲学史、思想史の著作の中で、ピコはルネサンスの精神を体現する代表的思想家とみなされてきた。ブルクハルトが唱えたルネサンスの精神とは、「世界と人間の発見」というテーゼに要約されるように、人々が神中心の中世的世界観の中から離脱し、現実の生活世界及び自然世界に根ざした具体的、個人的な人間像を発見することであったが、後にカッシーラーも基本的にはこの立場に追随し、「人間は自己自身の自由な形成者であるがゆえに、他の被造物に優る固有の尊厳を有する」という『演説』の記述に基づき、人間の精神の自由を確証しそれを人間における神性の刻印である、とする人間論をピコの基本的なテーゼであるとした。ピコの『演説』における人間の尊厳の思想の解釈に関しては、それを近代的人間観を高らかに歌い上げたマニフェストとして高く評価する見解から、それは演説のために執筆された弁論術の作品であって、ピコ自身の思想的立場をそこから読みとるのは適切ではないとする批判的な見解に至るまで、研究者間にかなりの意見の相違が存在しているが[1]、この『演説』の解釈を巡る議論は、今日においてもなお継続中であると言える。

ここで、この問題に関する筆者の見解を述べるに先立ち、まずこの『演説』が執筆された経緯をごく簡単に解説しておきたい。一四八六年、当時二三歳であった若き天才人文主義者ピコ・デラ・ミランドラは、法王庁のお膝元であるローマで大規模な公開討論会を開催してそこで自説を開陳し、当時の哲学を刷新するという大胆かつ無謀な計画を目論んだ。この公開討論会の目的は、ピコ自身の言葉によれば、「単にある一つの学説の意見のみならず、あらゆる種類の学説の意見を公衆の前に提出」し[2]、それを

吟味することであった。ピコは「誰の言葉でも誓いを立てることなく、哲学のあらゆる教師を渉猟し、あらゆる書物を詮索し、あらゆる学派を知ろうと企てた」[3]と語っているが、実際に彼が扱っている「あらゆる学派」には、単にスコラ哲学の代表的な学派のみならず、イスラムやユダヤの哲学、古代のアリストテレス注釈者と新プラトン主義者、さらにはピュタゴラスの数秘術、ゾロアスターやヘルメス・トリスメギストスの教説、カバラなど、彼が知り得た限りのあらゆる知的伝統が含まれている。（あるいは、詰め込まれている、と言った方がより正確かもしれない。）このうちの多くは当時の哲学界においてもほぼ未知であるか、あるいは読まれ始めたばかりの文献に基づいており、ピコはそれらが「多くの世紀の後、今や初めて私によって公開討論の試験の下にもたらされた」[4]と誇らしげに語っている。この目的のためにピコはこの公開討論会で検討すべき学説を九〇〇箇条に上る膨大な『提題集 *Conclusiones*』[5]の形にまとめ上げ、これを公開討論会の開催に先立って出版した。そして、この『提題集』の序文として、また同時にこの公開討論会の開会演説用として執筆されたのが、先に述べた『演説』である。

とは言え、当然予想されるように、当時弱冠二三歳であったピコがこのような大胆な計画を企てたことに対しては、教皇以下多くの人々から反対する意見がもたらされた。これはピコが開会演説として著した『人間の尊厳についての演説』の構成にも明確に表れている。この演説の冒頭部分、約三分の一ほどは、確かに後に付けられた題名通り、人間の尊厳とその優越性が称賛される内容となっているが、残りの大部分はほぼ全て自身の計画に反対する人々に対する弁明によって占められているのである。このような反対が寄せられた理由としては、ピコの年齢を理由にしたものや、扱われる提題のあまりの数の多さを理由にしたものなどがあったようであるが、特に決定的だったのはここに含まれるいくつかの提題が非正統的なものと見なされたことであった。当時の教皇インノケンティウス八世は、ピコが公開討論会を開催する前にこの著作を検討する委員会を設置し、その内容を吟味させたが、その結果九〇〇の提題のうち一〇が疑義ありとされ、さらに三つが異端と断ぜられた。ここで異端とされた三つの提題は、それぞれ「キリストは地獄に下った時実際はそこにいなかった」「大罪は永遠の罰を受けるには値しない」、そして「魔術とカバラ以上にキリストの神性を我々に確信させる学知は存在しない」というものであった。この教皇庁の決定に対してもピコが自著を取り下げることはなく、その結果としてこの『提題集』全体が異端と断ぜられ、ピコ自身も後にフランスで投獄されることとなった。

以上が『演説』と『提題集』の成立に関する事情であるが、以上を鑑みた場合、ピコの『演説』とその「人間の尊厳」に関するこれまでの議論には奇妙な点があることに気付かされる。それは、ピコにおける「人間の尊厳」の思想を扱う研究のほとんどが、『演説』の冒頭部分わずか三分の一ほどのみを論拠として用いており、その一方で本来の本文であるはずの『提題集』の方をほとんど考慮していないという問題である。『演説』の他にピコの人間論が表明されているテクストとして、ピコにおける「人間の尊厳」の問題を扱う研究者にしばしば用いられるものとしては、後

年の著作で創世記注解の形を取って執筆された『ヘプタプルス』の第四部「人間的世界」及び第語部「諸世界の序列と構造」における人間論などが参照されることはあるが、管見の及ぶ限り、『提題集』本文の記述に依拠してピコの人間論を論じようという試みは、これまでのところほとんど存在しないように思われる。すでに述べたような『演説』の執筆に至るまでの事情を考慮すると、ピコの人間論を巡るこのような状況は、ややバランスを欠いているのではなかろうか。

このように本来の本文であるはずの『提題集』が、ピコの「人間の尊厳」の思想を巡る議論においてある意味で無視されるという状況に至った理由は、実際に『提題集』の内容に目を向けてみる時、直ちに理解される。それは、この『提題集』で実際にピコが議論し、論証しようとしていることは、いわゆる「人間の尊厳」の問題ではなく、後述するようにそれとは全く別の事柄だということである。無論、九〇〇箇条に上る膨大な『提題集』の中には、人間の霊魂の上昇過程や、理性的本性や知性的本性の位置づけなど、人間論に関する伝統的な哲学的教説を扱う提題もいくつか存在してはいる。しかし、特に「人間の尊厳」を主題として論証しようとするような提題は、実はほとんどない、と言えるのである。それゆえ、ピコがこの『提題集』において、あるいはピコがローマで開催することを企図した公開討論会において、「人間の尊厳」の思想をその中心的なテーゼとして提示しようとした、とはとても言い得ないように思われる。むしろ、これまであまりに「人間の尊厳」の問題に関心が集中したことによって、『提題集』本来の主題は覆い隠されてしまい、またそれを執筆した一四八六年当時のピコ自身の意図も見えにくくなってしまっているのではないだろうか[6]。

本論では、以上で述べたような問題意識のもと、『提題集』本文の記述によりながら、ピコがこの著作に託した本来の主題を浮き彫りにすることを目指す。しかしながら、九〇〇箇条に上る膨大な提題集の全てをこの小論で扱うことは、分量的にも筆者の力量的にも到底不可能なので、本論では特にピコが「プラトン主義」をどのように理解したのか、という視点から、この『提題集』におけるピコの思想を明らかにしていきたい。

2 『提題集』第1部：ピコの歴史理解と「古代」の位置づけ

この『提題集』の執筆に至るまでの経緯は既に述べたとおりであるが、各提題の具体的な検討に入る前に、まずこの『提題集』全体の構造について解説しておく。この著作の執筆に際し、「哲学のあらゆる教師を渉猟し、あらゆる書物を詮索し、あらゆる学派を知ろうと企てた」とするピコの矜持はあながち口だけのものではなく、実際にこの著作では驚くほど多くのソースから得られた数多くの学派、学者の教説が彼によって扱われている。この九〇〇箇条に及ぶ『提題集』は大きく分けて第一部と第二部によって構成され、第一部には四〇二の、第二部には四九八の提題が集録され、合計で九〇〇となっている。この二部構成について大ざっぱに解説すると、まず第一部は様々な学派から得られた教説をピコ自身が要約し、解説する形で構成され、これに続く第二部は第一部で紹介、解説された諸学派の教理に対するピコ自身の見解が述べられるという形で構成される。以下、その中身を

詳しく見ていきたい。

第一部は、内容上大きく五つの大区分に分けられており、さらにその各々がいくつかの小区分に分けられるという形になっている。そしてその小区分の各々に数個から数一〇個までの提題が割り振られるという形で構成されている。例えば、一番目の大区分は「ラテン人の哲学・神学」であり、その下に順に「アルベルトゥス・マグヌス（第一区分、計一六提題、以下同様）」、「トマス・アクィナス（第二区分、四五提題）」、「メロンヌのフランチスクス（第三区分、八提題）」、「ドゥンス・スコトゥス（第四区分、二二提題）」、「ガンのヘンリクス（第五区分、一三提題）」、「アエギディウス・ロマヌス（第六区分、一一提題）」という六つの小区分がある、という具合である。以上の合計、一一五の提題がこの「ラテン人の哲学・神学」に割り振られているわけである。

この「ラテン人」に引き続く大区分は、順に「アラブ人」[7]、「ギリシャのペリパトス派」[8]、「プラトン主義者」[9]、そして「古代の諸哲学」となる。このうち、最後の「古代の諸哲学」に含まれているのは、順に「ピュタゴラス派の数学」、「カルデア人の神学」、「エジプト人ヘルメス・トリスメギストス」、「ヘブライのカバラの賢者」の四つの学派である。この五つの大区分、計二八の小区分によって第一部は構成されている。

このように、第一部は「ラテン人」「アラブ人」「ギリシャのペリパトス派」「プラトン主義者」「古代の諸哲学」という順番に並べられているが、これはピコがスコラ哲学から古代の諸学派に至るまでの様々な教説を疑似歴史的に配列することでこの第一部を構成しようとした、ということを意味する。具体的には、一五世紀当時のヨーロッパを支配していたスコラ哲学の様々な代表者から、アラブ、ギリシャの哲学などを経由しつつ徐々に時代を遡っていき、最後にヘルメス主義やカバラといった「古代」の叡智へと至る、という形になっている。（無論、実際にはピコが利用したヘルメス主義文献やカバラ文献などはピコが想定したよりも遙かに年代的に新しいものであるが。）この点につき、ピコは『演説』で次のように述べている。「ギリシャ人やアラブ人の哲学者を度外視して、ラテン人の哲学だけ…中略…が論じられたとしても、何の価値があったろうか。あらゆる知恵は蛮族からギリシャ人たちへ、ギリシャ人たちから我々へと流れ及んだのであるから。」

ここには哲学史、さらには人類史に関するピコのある価値判断が働いている。ピコの目に映った当時のスコラ哲学は、学派間の争いと不協和に満ちたものであり、彼の精神を満足させるものではなかった。それに対し、ピコは「古代」の諸哲学、プラトン主義やピュタゴラス主義、ヘルメス主義やカバラの間に、共通したモチーフと根元的な統一性が存在していると考えた。すなわちこの歴史モデルは、不協和と争いに満ちた「現代」の哲学から、統一的で調和的な「古代」の叡智へと徐々に向かっていく、という形を取っているのであり、ピコはこの著作を通じて同時代人たちを古代の黄金時代へ帰還させることを目論んでいるのである。

ピコの理解では、アリストテレスの哲学とプラトンの哲学も、ラテン人とアラブ人の哲学も、決して矛盾するものではなかった。しかし、古代ギリシャのアリストテレス注釈者から、イスラ

ム、ユダヤの注釈者たちを経由するうちに、アリストテレスの哲学は徐々に細分化され、その内部に様々な矛盾し合う教説が併存するようになり、プラトン主義哲学や、さらには神的な宗教的真理からも隔たってしまった。そして「現代」のスコラ哲学を経てその哲学は際限なく分裂し、様々な学派が争乱を奏でる悲劇的な状態に陥ってしまっている、とピコは考えた。このような状況において、哲学を再び原初の統一と調和へと呼び戻すことをピコは自らの課題としたのである。

このようなピコの目的意識は、実際の各々の小区分における各提題での議論にも明確に表れている。この『提題集』においてピコが主に試みていることは、各々の学派における哲学的概念の差異を明確化したり、あるいは自身の主張する教理を厳密な論理的手順で証明したりといったことではない。そうではなく、ピコがやろうとしていることはまさしくその反対であり、彼は各々の学派における教説をより抽象化した上で、それらが相互に一致することを示そうとするのである。例えば以下のような提題がそうである。

「バーヒルにおいて山羊や子羊の霊との類似性がいかなるものであるか読んだ者なら誰でも、ゾロアスターにおける山羊によって理解されねばならないことを理解するであろう。[10]」

「深く観想する者は、前述したヘルメスの提題で述べられた一〇の懲罰者が、カバラにおける一〇の邪悪な系列とその統率者に一致することを知るであろう。[11]」

「オルフェウスにおいて夜と呼ばれているものは、カバラにおけるエン・ソフと同じものである。[12]」

「ここまでの賛歌（訳注：オルフェウスの賛歌）の働きは、カバラの働きと同じもの以外の何ものでもない。[13]」

以上のような記述は枚挙に暇がない。このように、ピコがこの『提題集』及び実現を目論んだ公開討論会で目指したことは、厳密な哲学的考察といった事柄ではなく、またいわゆる「人間の尊厳」を示すことでもなく、あくまで諸哲学の調和、一致を、当時最新のテキストに基づきつつ示すことだったことは明らかであろう。

また、上記の提題からも明らかなように、ピコの議論において特に目立つのが、各々の学派の教説をカバラの概念と一致させようとする傾向である。ピコは、プラトンの哲学、ゾロアスターの神学、ヘルメス・トリスメギストスの教説などを論じる部分において、それらのテキストから引き出した様々な概念を、カバラのテキストから引き出したそれと関連づけることを試みている。これは第一部全体の構成においても表れており、第一部の最後に置かれた大区分「古代の諸哲学」の中の最終部分、すなわちピコの考える哲学史、人類史上の最初の地点に「カバラの賢者」という小区分を置いているが、これはピコがカバラの教説を、そこからその後のあらゆる学派が流れ出た古代の叡智の源だと考えていたことを意味している。[14] ピコはカバラの思想を西欧ラテン世界に導入した最初の人物とされるが、ピコは当時知られ始めたばかりのこのテキスト群こそ、神から人類に与えられた知

恵の書である聖書を正しく読み解くための最良の導きの書であり、そしてそこからあらゆるその後の歴史における様々な哲学的教説、ピコの目からすれば分断され、混乱してしまった教説が生じたと考えたのである。

そして、ここにおいてピコがプラトン主義をどう理解していたのかも明らかとなる。第一部の構成を見れば分かるように、ピコはプラトン主義を「古代の諸哲学」の直前に置いているが、既に述べたこの『提題集』における歴史理解に照らし合わせれば、これはプラトン主義をヘルメス主義やカバラといった古代哲学の直系となる位置、すなわち後生の諸哲学の中ではもっとも高い位置に置いていることになる。ピコの理解に従えば、ヘルメス主義やカバラなどの文献が抽象的な表現の中に覆い隠した秘儀的知識を哲学的な言語で表現し、明らかにしたものがプラトン主義なのである。それゆえ、プラトン自身のテキストも、またプロティノスやイアンブリコス、プロクロスといった後裔のテキストも、あくまでそれ自体として理解されると言うよりは、それ以前のより神的な哲学への中継点として解説される。以下はその例である。

「プロクロスの精神から導かれた前述の提題に従うことで、ゾロアスターの言葉の一つをギリシャ人たちが読んでいたような形で説明できるようになるだろう。[15]」

それでは、具体的にピコは古代における調和的哲学の核心として、一体どのような思想を念頭に置いていたのであろうか。その答えは、ピコ自身の見解が語られる次の第二部において述べられる。

3 『提題集』第二部：魔術と形相的算術

これまで述べてきた『提題集』の第一部に集録されているのは、一次文献あるいは二次文献から、ピコがある意味では恣意的に導き出した、過去の哲学者あるいは哲学的伝統の教説であり、この第一部に集録されている提題の全てが必ずしもピコ自身の見解と一致するわけではなかった。これに対し、第二部では第一部で議論された様々な問題に関するピコ自身の見解が述べられる。第一部で紹介、解説された「あらゆる学派」の時系列にある程度従う形で、それに対する彼の見解が順を追って展開されていき、ピコはそれによって諸学派の調和、一致を示そうと試みる。第一部と同じように、この第二部も計一〇個[16]の大区分に分けられたテーマごとに行われる。第一部とは異なり、小区分では分けられていない。第二部冒頭の分類に従えば、順に、第一区分「（訳注：プラトンとアリストテレスの）逆説的な調停」、第二区分「自然哲学」、第三区分「逆説的な教理化」、第四区分「神学」、第五区分「プラトン主義」、第六区分「数学」、第七区分「ゾロアスターとカルデア人」、第八区分「魔術」、第九区分「オルフェウスの賛歌」、そして第一〇区分「カバラ」の計一〇区分であり、ここに含まれるのが合計四九八提題である。[17]

この第二部は、内容上大きく二つに分けることができる。前半の第一区分から第四区分まで、すなわち提題五九九番目までと、後半の第5区分から第一〇区分まで、すなわち提題六〇〇番以

降である。

前半は、ピコの分類に従えば順に「逆説的な調停」「自然哲学」「逆説的な教理化」「神学」を扱うが、ここでは主に第一部の前半三つの大区分、「ラテン人」、「アラブ人」、「ペリパトス派」で扱われた問題に関するピコの見解が述べられ、そこにピコが見いだした不調和や矛盾を解消し、新たな調和的な哲学体系を構築するための努力が行われる。それに対し後半は、同じくピコの分類に従えば順に「プラトン主義」、「数学」、「カルデア人」、「魔術」、「オルフェウス教」「カバラ」で、第一部の後半二つの大区分、「プラトン主義者」と「古代の諸哲学」に関するピコの見解が述べられる。この『提題集』における最終部分、計三〇一の提題で語られているテーマこそ、この著作における最大のクライマックスであり、また最大の問題ともなる部分である。以下の論争的な提題にそれは端的に表れている。

「魔術とカバラ以上にキリストの神性を我々に確信させる学知は存在しない。[18]」

「魔術は自然に関する学知の最も高貴な部分である。[19]」

このようにピコは魔術 magia を最高の学知 scientia として極めて高く評価しており、『提題集』後半のほとんどの部分をこのテーマに関する議論に費やしている。それでは彼が考えていた「魔術」及び「学知」とはいかなるものなのであろうか。

教会が禁止していたとは言え、一五世紀においていわゆる魔術は、一般大衆、知識人によって共に承認されていたと言える。具体的には予言占星術を始め、護符魔術や精気魔術、ダイモン魔術などが挙げられるが、特に天体からの遠隔力、宇宙と人体の相互作用という魔術的観念は、天文学と医学の領域において一七世紀に至るまで大きな影響を及ぼし続けた。しかしながら、ピコの『提題集』における「魔術」という概念は、このような通俗的な魔術概念とはかなり趣を異にしている。むしろピコはこのような魔術的実践に対しては、後年の『占星術駁論』という著作が示すように批判的な態度を取り続けており、この『提題集』においてもそれは同様である。天体からの力や宇宙と人体の相互作用などの魔術的世界観自体は承認しつつも、実際に人々の間で行われている魔術は、何の根拠も真理性もない迷信的な誤謬だとピコは断じる。

ここにも表れているように、ピコにとっての「魔術」とは、何らかの実際的あるいは現世的な利益、効能を得ることを目的とした技術ではない。事実、この『提題集』第二部の第八区分「魔術」においても、実際に魔術を行う際の技術的な手続きであるとか、あるいはそれによって実際に引き起こされる奇跡とその効能などに言及するような提題はほとんど述べられていない。この点において、例えばデッラ・ポルタの『自然魔術』などのような実際的技術とその効能を重視するような著作などとは非常に対照的である。

むしろピコの関心は、ピコ自身の言葉によれば「魔術という学知の普遍的な理論的基盤」を確立すること、換言すれば自然が魔術的な仕方で行うところの奇跡的なわざのシステムを合理的に把握することに向けられている。魔術をどのように実践するか、

そこから何が得られるのかは主たる関心事ではない。そうではなく、自然の中に内在している合理的、理性的な秩序を、同じく理性的霊魂であるところの人間が知的に把握すること、それこそがピコにとっての「魔術」なのである。それゆえ、魔術は技術と言うよりも、むしろ学知としばしば呼ばれている。

「もし、それが単一のものとして合理的であるか、あるいはその大部分が合理的であると我々に直接に知られるような自然本性があるのであれば、それはその最高の状態において魔術を有する。そしてまたそれが人間に分有されることによって、それはより完全になりうるだろう。[20]」

この提題で述べられているように、ピコにとっての「魔術」とは、人間が生み出した技術、技法と言うよりも、自然本性に内在する合理性、理性的秩序のことを意味しており、そして同様に理性的存在である人間はそれを分有すべきであるとされる。そしてここでの分有とは、そのような合理性を人間が何らかの方法によって導きだし、整序することに他ならない。そのようにして獲得されたものこそが、「自然に関する最高の学知」であるところの「より完全な魔術」とされるのである。

それでは、そのような合理性を導き出すための具体的な方法としてピコはどのようなものを考えているのか。またそのような方法によって獲得される、魔術を始めとする学知とは、ピコにとってどのような意味を持つものなのか。『提題集』後半部分では魔術に関する複数のセクションが扱われているが、そのうちの一つである「数学」のセクションに、この問題に関してヒントを与える提題が収録されている。それは以下のような提題で始まるが、ここでのピコの言葉は先の魔術に関する場合のそれとは対照的である。

「数学は真の学知ではない。[21]」

「もし幸福が思弁的な完成の中に存するなら、数学は幸福へと導くことはない。[22]」

魔術を最高の学知として称賛し、その一方で数学を学知ではないと断言するピコの言葉は我々の目には奇異に映るが、この点からピコが学知という概念をどのような意味で用いているかが明らかとなる。学知とは、なによりもそれが完全な形で得られた場合に人間を幸福へと導くような対象に関しての知識体系でなければならないのである。ピコにとり、数学という学問が対象とする主題は、「それらが完全な形で取り扱われる場合でも、知性を完全にすることはない」ものと映ったのであり、さらにピコはユークリッド幾何学の訓練などは神学者の精神にとって有害なものだとまで述べている。[23]

しかし、ピコはこれらを「質料的算術」と呼び、自然哲学の基礎を破壊する有害なものとして批判するものの、他方でこれらとは違う「形相的算術」は他の学知を求めるための手段として非常に有効なものであると認めている。ここで「質量的算術」と呼ばれているものは、例えば円やパラボラの求積問題や高次方程式の解法などの伝統的な数学的問題であり、ピコはこれらが「質

量的」、すなわち上位のものの像としてではなく数それ自体を対象としてしまっている数学と捉え、それゆえ人間を幸福へと導くような真の学知ではないと考えた。これに対し、「形相的算術」とは上述したような一般的な数学的問題を考察するものではなく、あくまで数を媒介物、上位のものの像として捉え、他の学知を求めるための手段として活用するような数の学のことを意味する。ピコはそのような数の道を通じた認識こそが理性的霊魂としての人間に相応しいものであると考えた。

「数学はそれ自体としては学知ではないが、他の学知を求めるための手段ではある。[24]」

「数により、あらゆる知られうるものの研究と理解へと続く道が得られる。[25]」

しかしながら、ピコが考える数学、「形相的算術」によって研究される対象は、いわゆる数学的な問題ではなく、また一〇〇年余り後の科学革命において大きく進展することとなる自然科学的な問題でもなかった。そうではなく、ピコがこの方法によって研究しようとしたのは、あくまで像としての数を媒介として知られうるところの「上位のもの」であり、それは端的に述べるなら神学的、哲学的な問題であった。事実、この「数学」のセクションにおいて、ピコはこの方法によって回答を与えられるべき七四の問題を列挙しているが、それらの大半は、「神は存在するか」「天において諸元素はいかなる形で存在するか」「知性的本性と理性的本性の間に中間物は存在するか」「第一質料はいかなる仕方で神に依存するか」といった伝統的な神学的、哲学的問題で占められている。

ピコにとり、先に述べた魔術という学知によって把握されるところの「自然本性に内在する合理性」とは、こうした伝統的教説によって構築された宇宙像が有する「合理性」に他ならなかった。ただし、ピコはそれをスコラ的な方法によってではなく、彼が言うところの「数の方法」「形相的算術」によって証明することこそを望んだのである。

4　モデルケースとしてのプラトン主義

これまで述べてきたように、『提題集』においてピコは形相的算術に基づく学知の構築という目的を掲げ、その方法によって自然世界と聖書とを解釈しようとしているが、ピコがこのような着想を得た背景としては、プラトン主義の文献、特にプロクロスが重要な意味を持っている。『提題集』第一部の解説において述べたように、第一部の最初の四つの大区分、ラテン人、アラブ人、ペリパトス派、プラトン主義の四つにおいては、それぞれの学派の代表的哲学者の学説を解説する形で議論が進むが、ここで最も多くの提題数が割り振られて詳細な解説が行われているのは、実はトマスでもアヴェロエスでもなく、プロクロスの教説なのである。「プラトン主義」という項目内で比較してみても、プロティノスが一五提題、イアンブリコスなども七提題しか割り当てられていないのに対し、プロクロスはなんと五五もの提題、それも一つ一つが比較的長い提題によって詳細に解説されており、このプロクロスへの傾倒は『提題集』全体の中でも明ら

かに際だっていると言える。

このピコの五五項目にも上るプロクロスに関する提題のほとんどは、プロクロスの「ヘナデス」体系に関する説明にあてられている。プロクロスのヘナデス理論は極めて難解な概念体系であり、それに関してここで十全な解説を行うことはできないので、ここではごく簡単なその大枠の解説と、ピコ自身のヘナデス理解とに焦点を絞って議論を進めたい。一般にプロティノスに代表される新プラトン主義の宇宙論においては、まず英知界と感性界が区別されるが、このうちの英知界は「一者－知性－霊魂」という三段階の階層、「三つの原理的なヒュポスタシス」によって成り立つとされる。新プラトン主義は、一者から知性が、知性から霊魂が、そして英知界から感性界が、それぞれ発出したとすることで、諸存在をそのありように応じて階層づけ、この現実の世界における多様性を説明すると共に、下位の諸存在と上位の諸存在との間に直接的な関係が存在することを認めることで、下位の諸存在が自己本来のありようである上位の諸存在へと帰還していく道が存在することも理論づけたと言える。

プロクロスもこの新プラトン主義的な図式を受け継いだが、プロクロスは「一者－知性－霊魂」という新プラトン主義の三一をより細分化し、上位の諸存在から下位の諸存在に至るまでの階梯に複雑な体系的説明を与えた。その理由は複数あるとされるが、そのうちの一つは、一者がその名の通り一なるものであるのに対し、知性は複数存在するものであり、それゆえ一者から多数の知性が流出するまでには中間的な諸段階が必要だと考えたから、というものである。そこで設定されたのがヘナデス（単一者[26]）の理論であり、『神学綱要』においてプロクロスは、分有されざる一者の直後、それに引き続く諸段階の最上部に、多数ではあるが無限ではない複数の単一者すなわち神々が存在し、これらの単一者が分有されることによって諸存在の多様性が生じるとの議論を展開した。

その上でプロクロスの体系においては、プロティノスにおいては概念上区分されていただけの直知するものと直知されるものとが別々の段階として明確に分離され、単一者に引き続く諸段階は順に「直知されるもの＝存在」、「直知され、直知するもの＝生命」、「直知するもの＝知性」として整序された。単一者すなわち神々は存在、生命、知性を超えるものだとされるが、これらの諸段階も単一者の類に属し、その特性を分有する限りにおいてやはり神的なものなのであり、しばしば端的に「神」とも呼ばれている。そして特に『プラトン神学』においては、これらの「存在－生命－知性」という上位の諸段階の下に、さらに「超世界的な神々」「世界内存在としての神々（月下界の神々）」といった段階が想定され、それぞれの特性と対応する具体的な神々が解説されている。換言するなら、プロクロスの体系は、上位の神々から下位の神々が連続的に発出、展開していく過程と、それら上位／下位の神々がそれぞれの段階において有する特性を、三一という数的な秩序に基づきつつ論理的に説明しようとするものなのである。

そして、このようにして英知界の神的存在者に関する理論が拡張された結果、『神学綱要』においては存在、生命、知性を超えるとされ、諸段階の最上部に置かれていた単一者すなわち神々

の概念にも変化が生じることとなったようである。ヘナデスは元来分有されざる一者の直後に置かれた上位の概念であったはずだが、『プラトン神学』において単一者という用語は、その特性を分有する下位の段階の神々に対しても適用され、「ユピテルという単一者」「ミネルヴァという単一者」といった形でも用いられているのである。ここにおいて、ヘナデス概念は一者に由来する単一性を分有する神々あるいはその特性に対する一般的な呼称として用いられており、ピコの『提題集』において踏襲されているのもこのような意味での用法である。

この発出の諸段階に関するピコの理解において注目すべきなのは、三つで一揃いになる三一の形式をピコが特に重視しているという点である。まず「直知されるもの」である「存在」は第一の三一と呼ばれるが、この三一を構成する三つの段階の各々は、その下に三つの下位区分を有しているとされる。例えば、直知されるものの第一の三一ならば、「限定、無限定、その混合物」という下位区分を有している。それゆえ、その構成全体は三×三の形式ということになる。同様に第二の三一である「生命」も三×三の構造を持つとされるが、これに対し、「直知するもの」である「知性」は七つ組の構造（三－三－一）を持つとされる。特にその三番目の段階は「神々の殺害」「分断されたヘナデス」などと呼ばれ、「存在－生命－知性」という上位の三一からの転換点として特異な位置を与えられている[27]。これに引き続く「超世界的な神々」も、やはり三×三の三つ組の構造を持つとされ、それぞれの特性に対応する具体的な神々も数多く挙げられている。

このプロクロスのヘナデス体系に関するピコの解説は、概念の用法に関して厳密かつ首尾一貫しているとは言い難いものであるが、ピコ自身の意図を推し量るには十分である。ピコがここで行おうとしていることは、三という「形相的数」に基づく秩序だった世界理解のモデルケースとして、プロクロスの体系を提示することだと言える。すでに述べたようにピコは形相的算術による魔術的な世界理解、聖書理解こそが古代の諸哲学の根本にあると理解していたが、このプロクロスのヘナデス体系は、ヘルメス文書やカルデア人の神託、カバラなどにおいては曖昧な言葉の内に隠されているそのような思想を、哲学的で洗練された言語で代弁したものとして受け止められた。それゆえ、「プロクロスの精神から導かれた提題に従うことで、ゾロアスターの言葉の一つをギリシャ人たちが読んでいたような形で説明できる[28]」とピコは述べるのである。

三という「形相的数」に従った諸段階の連続的展開というプロクロスの思想は、古代から連綿と続くそのような秘儀的知識の存在と、その真理性とをピコに確信させるものだった。『提題集』第二部において展開されるピコの魔術論、数学論、カバラ論などは、全てそのような確信と「プラトン主義」理解に立脚しつつ構築されたものなのである。ピコが活躍したルネサンス期は、中世のアリストテレス主義に対してしばしばプラトン主義復興の時代と言われるが、このピコの「プラトン主義」理解は、ルネサンスにおける「プラトン主義」の実際のありようが、いかに複雑なものであったのかを端的に示していると言える。中世において知られていなかった数多くのプラトン主義文献が復活したという意味では、確かにルネサンスはプラトン主義復興の時代であ

る。しかし本論で見たように、それは必ずしも、プラトン自身や新プラトン主義者の思想と完全に一致するような形で展開されたわけではなかった。ピコの『九〇〇箇条の提題集』と公開討論会という計画は、再び発見されたプラトン、新プラトン主義者、それにヘルメス主義やカバラなどの文献群に対するルネサンス人文主義者の反応の多様性を示す一つの好例だと言えるだろう。

【註】

（1）ピコの人間論を巡るこれまでの論争については、伊藤博明「ピコ・デラ・ミランドラ――宇宙における人間の位置とその本性――」（根占献一他『ルネサンスの霊魂論』、一九九五所収）などが詳しい。

（2）『人間の尊厳についての演説』、二二七頁（佐藤三夫他訳『ルネサンスの人間論　原典翻訳集』、一九八一所収）

（3）*ibid.*,p226

（4）*ibid.*,p228

（5）主要原典としては、S.A.Farmer, *Syncretism in the West: Pico's 900 Theses* (1486), 1998 所収の校訂版を参照した。

（6）いわゆるブルクハルト流のピコ理解に関しては近年の研究で多くの批判が行われている。S.A.Farmer, *Syncretism in the West: Pico's 900 Theses* (1486), 1998 や Louis Valcke, *Pic de la Mirandole: Un Itineraire Philosophique*, 2005 など参照。

（7）この「アラブ人」という区分名はピコの命名であるが、実際にはスペインのユダヤ教徒なども含まれており、実質的には「イスラム及びユダヤの哲学」と呼ぶ方が適切である。ここに含まれる小区分は順に以下の通りである。「アヴェロエス（第七区分、四一提題）」、「アヴィケンナ（第八区分、一二提題）」、「アル・ファーラービー（第九区分、一一提題）」、「イサアク・イスラエリ（第一〇区分、四提題）」、「アヴェンゾアル（第一一区分、四提題）」、「モーセス・マイモニデス（第一二区分、三提題）」、「トレドのムハンマド（第一三区分、五提題）」、「アヴェンパケ（第一四区分、二提題）」。以上計八区分、八二提題。なお、このうち第一三区分の「トレドのムハンマド」だけはファーマーの版でも一体ピコが誰のことを指しているのかが特定されていない。ディ・ナポリはアル・フワーリズミーを指すと解し、キースコフスキーはアブラハム・アブラフィアのことと解しているが、正体は不明である。

（8）この「ギリシャのペリパトス派」に含まれる小区分は順に以下の通りである。「テオフラストゥス（第一五区分、四提題）」、「アンモニウス（第一六区分、三提題）」、「シンプリキオス（第一七区分、九提題）」、「アプロディシアスのアレクサンドロス（第一八区分、八提題）」、「テミスティオス（第一九区分、五提題）」。以上計五区分、二九提題。

（9）この「プラトン主義者」に含まれる小区分は順に以下の通りである。「プロティノス（第二〇区分、一五提題）」、「アラブ人アデラード（第二一区分、八提題）」、「ポルフィリオス（第二二区分、一二提題）」、「イアンブリコス（第二三区

分、九提題)」、「プロクロス(第二四区分、五五提題)」。以上五区分、九九提題。なお、このうち第二一区分の「アラブ人アデラード」とは、数学、占星術関連のアラビア語著作をラテン語訳したことで有名なバースのアデラード(一〇七〇頃―一一四六以降)のことを指しており、ピコは一一、一二世紀の人間であるアデラードをプロティノスの直弟子と誤解したようである。また、この「プラトン主義者」の大区分では特にプロクロスに対して第一部全体でも最大の五五もの提題が割り振られており、特に『プラトン神学』に基づいた詳細な解説が行われている。

(10) 『提題集』第二部第八区分第一五提題

(11) 『提題集』第一部第二七区分第一〇提題

(12) 『提題集』第二部第一〇区分第一五提題

(13) 『提題集』第二部第一〇区分第二一提題

(14) ピコに対するカバラからの影響については、Chaim Wirszubski, *Pico della Mirandola's Encounter with Jewish Mysticism*, 1989, S.A.Farmer, *Syncretism in the West: Pico's 900 Theses* (1486), 1998 などを参照。

(15) 『提題集』第一部第二四区分第三一提題

(16) ここで一〇という数字を選んだのは明らかに偶然ではなく、特にカバラのセフィロートの数と対応させることを考えてのことと思われる。なお、実際には印刷の過程で若干の修正が入り、短いセクションが一つだけ挿入されることとなった。よって第二部の実際の大区分の数は計一一となっている。

(17) なお、実際は印刷の過程でいくつかの提題が削除され、その穴を埋めるためにこの一〇個の大区分の真ん中にあたる六番目に『原因論 *De causa*』に関するごく短いセクションが挿入された。この『原因論』は、プロクロスの『神学綱要』に依拠しつつアラビア世界で執筆され、出所不明のままラテン世界にも輸入された著作である。当然一五世紀人であるピコがそのような成立過程を認識していたはずもないが、にも関わらず、新たに挿入する部分にわざわざプロクロスと深い関係にあるこの著作が選ばれたという点からも、ピコがプロクロスの体系に対して強い共感を覚えていたことを窺い知ることができると思われる。この挿入により、第二部の実際の構成は計一一区分となっている。

(18) 『提題集』第二部第九区分第九提題

(19) 『提題集』第二部第九区分第四提題

(20) 『提題集』第二部第九区分第一四提題

(21) 『提題集』第二部第七区分第一提題

(22) 『提題集』第二部第七区分第二提題

(23) このように数学を嫌悪する態度は、ピコ以外のルネサンス人文主義者にも共有されている。一五世紀においては今日の一般的な代数的記号法などはまだ発明されておらず、数学的な論理式は文章で表現されていたが、人文主義者らはこれらの数学的言語を晦渋で優雅さのない有害なものとして嫌悪した。教育改革者として名高い人文主義者エラスムスなどは、数学に関する授業を教育カリキュラムから排除することまで提言している。

(24) 『提題集』第二部第七区分第三提題
(25) 『提題集』第二部第七区分第一一提題
(26) トマス・テイラーの『プラトン神学』英訳では monad、ピコの『提題集』原版では unitas、ファーマーの訳では unity と、それぞれ訳されている。
(27) 三＋七＝一〇であるという点からも、ピコはこの直知するものにおける七番目の「分断されたヘナデス」とカバラにおける第一〇セフィラ（マルクト、王国。エデンから分離されたイスラエルの民の象徴）との間に関連性を想定していたようである。
(28) 『提題集』第一部第二四区分第三一提題